

## 消化管憩室の臨床的研究

著者	高橋 譲
号	740
発行年	1972
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/19002">http://hdl.handle.net/10097/19002</a>

氏 名 ( 本 籍 )	たか 高	はし 橋	ゆずる 譲
学 位 の 種 類	医	学	博 士
学 位 記 番 号	医	第	7 4 0 号
学位授与年月日	昭和 4 7 年 2 月 2 3 日		
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当		
最 終 学 歴	昭和 1 6 年 1 2 月 岩手医学専門学校卒業		
学位論文題目	消化管憩室の臨床的研究		

( 主 査 )

論文審査委員 教授 山 形 敬 一 教授 鳥 飼 龍 生

教授 佐 藤 寿 雄

# 論文内容要旨

## I はじめに

消化管憩室は少なからず見出されるが、いまだ不明な点も多い。私は憩室の頻度、好発部位、発見個数、大きさ、体型や便通との関係について考察した。

## II 調査対象

最近5年間の山形内科の患者のうち消化管のレ線検査を行なったものを対象として、食堂、胃、十二指腸、および大腸の憩室について推計学的な検討を加えた。上部消化管の検査数は12799例（男子57.6%）、大腸のそれは3661例（男子45.8%）である。

## III 検査成績

1. 消化管憩室の性、年齢別分布および発見頻度 a 食堂憩室 年齢分布は40～50才代を頂点とし、発見頻度は総計では0.83%である。性、年齢別で男子では0.73%で年代別では70才代1.87%、50才代1.32%、40才代1.21%などであり、女子では0.96%で年代別では70才代5.11%、50才代1.72%、60才代1.56%などである。b 胃憩室 年齢分布は男女とも30才代が多い。発見頻度は総計では0.18%である。性、年齢別で男子では0.20%で年代別では10才代0.46%、30才代0.34%、50才代0.16%などであり、女子では0.15%で年代別では30才代0.30%、60才代0.19%などである。c 十二指腸憩室 年齢分布は男女とも50～60才代が多い。発見頻度は総計では1.22%である。性、年齢別で男子では1.06%で年代別では80才代6.67%、70才代3.00%、60才代2.70%などであり、女子では1.44%で年代別では80才代10.00%、70才代5.11%、60才代4.87%などである。d 大腸憩室 年齢分布は男子では70才、40才、50才代が多い。発見頻度は総計では1.20%である。性、年齢別で男子では1.19%で年代別では70才代9.52%、40才代1.67%、10才代1.50%などであり、女子では1.21%で、年代別では50才代2.17%、70才代2.00%、40才代1.80%などである。

2. 消化管の部位別による憩室の分類 十二指腸憩室47.4%、食堂憩室32.2%、大腸憩室13.4%、胃憩室7.0%である。

3. 各部消化管憩室の発生部位 食堂憩室では気管枝上方に58.7%、胃憩室では噴門部に75.0%、十二指腸憩室では下行部に70.5%、大腸憩室では上行結腸に42.9%を占める。

4. 各部消化管憩室の発見個数 単発は食堂憩室および胃憩室については約90%、十二指腸憩室については約80%を占めるが、大腸憩室については約50%に減じ、多発のものが比較的多くみられる。

5. 各部消化管憩室の長径および幅径 食堂憩室について長径で0～9mm65.7%、幅径で10～29mm59.6%、胃憩室について長径で0～9mm75.0%、幅径で0～9mm62.5

%であり、十二指腸憩室について長径で10～29mm 58.4%、幅径で10～29mm 50.8%、大腸憩室について長径で0～9mm 84.8%、幅径で0～9mm 79.8%である。6. 各部消化管憩室の体重指数 憩室のない対照例と比較すると憩室例の体重指数には特異的な所見はないと思われる。

7. 消化管憩室の便通 併存疾患のない群について検討すると、便通が異常で3～4日に1回あるいは1日2～3回のものは大腸憩室のみに約12.0%認められる。

#### IV 考 按

消化管憩室の発見頻度については多くの報告があるが検査対象の性、年齢別構成に殆んど考慮が払われていない。憩室の発見頻度については食道では0.22%あるいは0.35%、胃憩室では0.025～0.56%、十二指腸憩室では0.67～5.76%、大腸憩室では2.02～24.43%などと報告者により異なる。しかし総括的な頻度と性、年齢別にみたそれとの間には著しい相違が認められることがあるのでこの点に注目すべきと考える。消化管の部位別による憩室の分類についてはDixonらの報告のS状結腸59.5%、下行結腸45%などと比較すると、わが国では大腸憩室が少なく十二指腸憩室が多いと思われる。各部消化管憩室の発生部位についてはこれまでの報告と同様であるが、ただ大腸憩室ではさきのDixonらの報告によるS状結腸と下行結腸に著しく多いのに比較して私の成績では男子では上行結腸と盲腸に66.7%、女子では上行結腸に43.8%みられている。大腸憩室は単発のものは約50%で多発のものが比較的多くみられているが、他の報告者も同じような成績を挙げている。憩室の大きさについては充盈の程度、体位、撮影条件などの影響をうけるが、私の成績はこれまでの報告と差がないと思われる。大腸憩室の原因の一つとして肥満があり、Wierderは高脂肪食で飼育した鼠の大腸に憩室の発生を認めているので体重との関係を検討したが、憩室に特徴的な所見を指摘できなかつた。大腸憩室は便秘を伴うことが多いといわれ、また内圧亢進も憩室に関係を有するようであるが、私の成績でも大腸憩室では便通異常を示すものが他部の憩室に比較して多く、何らかの因果関係を有すると思われる。

#### V 結 論

1. 消化管憩室の総括的発見頻度は、食堂憩室0.83%、胃憩室0.18%、十二指腸憩室1.22%、大腸憩室1.20%である。2. 憩室の発見頻度を性、年齢別にみると一般に高年層に多いが、胃憩室、大腸憩室では若年層にも比較的多い。3. 消化管憩室329例を発生部位別にみると十二指腸47.4%、食道32.2%、大腸13.4%、胃7.0%である。4. 各部消化管憩室の好発部位は食堂憩室では気管枝上方、胃憩室では噴門部、十二指腸憩室では下行部、大腸憩室では上行結腸である。5. 憩室の発見個数は食堂憩室、胃憩室、十二指腸憩室では大多数が単発であるが、大腸憩室では単発は50%で多発のものが多く。6. 憩室の大きさは長径、幅径とも0～9mmから10～19mmのものが大部分であり、胃憩室、大腸憩室では小さいものが、十二指腸憩室では大きいものが多い。7. 憩室の便通は便秘の傾向にあるもの、反対に排便回数が多いものは大腸憩室のみに約12%に認められる。8. 憩室患者の体重指数は対照例との間に差異がない。

## 審 査 結 果 の 要 旨

著者は最近5年間の山形内科の患者のうち消化管のX線検査を行なつた16460例を対象として食道，胃，十二腸，および大腸の憩室について推計学的な検討を加え，次の結論を得ている。

消化管憩室の総括的発見頻度は，食道憩室0.83%，胃憩室0.18%，十二指腸憩室1.22%，大腸憩室1.20%で，一般に高年層に多いが，胃憩室，大腸憩室では若年層にも比較的多い。また，各部消化管憩室の好発部位は食道憩室では気管枝上方，胃憩室では噴門部，十二指腸憩室では下行部，大腸憩室では上行結腸である。憩室の発見個数は食道憩室，胃憩室，十二指腸憩室では大多数が単発であるが，大腸憩室では多発のことが多いが，胃憩室，大腸憩室では小さいものが多い。なお，憩室の便通は便秘の傾向にあるもの，反対に排便回数の多いものは大腸憩室のみに約12%に認められ，憩室患者の体重指数は対照例との間に差異がないと結論している。

したがつて，本論文は学位を授与するに値するものと認める。